

# ◆薬師寺旧境内の調査 — 第293-8次

## 1. はじめに

薬師寺法具蔵建設にともなう事前調査。調査地は玄奘三蔵院（昭和58年度発掘調査区）の北西に位置し、奈良時代における苑院の推定地である。中世以降は子院が建ち並んだと考えられており、17世紀後半頃の「伽藍寺中并阿弥陀山図」や「伽藍寺中之図」（いずれも『奈良六大寺大観』）をみると、福蔵院の境内となっている。また、11世紀末～12世紀末頃の池を検出した第223-3次調査区からは、南約40mの位置にあたる。調査面積は158m<sup>2</sup>、調査期間は1999年3月1日～4月5日。

調査地の土層は、基本的には盛土、茶灰砂質土（畑作耕土）、暗灰褐砂質土（整地土）、淡黄褐砂質土（整地土）、緑黄灰微砂（地山）である。後述するように、調査区東半には大小無数の土坑（土取り穴）があるが、西半はそれがほとんどなく整地土もよく残る。これは調査区西半全体が歴史時代以前の流路であり、土取りにむかない地

山のためだろう。遺構検出は標高約61.4mほどの淡黄褐砂質土でおこなったが、下層遺構の状況を確認するため、調査区の北約1/3を地山まで掘り下げた。

## 2. 検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物数棟、井戸4基、溝4条、土坑多数である。

SD2710 調査区西端で検出した南北溝。溝底付近に人頭大の玉石が数個あり、当初は護岸が施されていた可能性もある。溝の西端が調査区外になるため全幅は不明。溝の深さは約40cmで、調査区西壁では溝底の様相を呈している。溝埋土には奈良時代前半～10世紀前半の瓦・土器を含み、前述の淡黄褐砂質土はこの溝を埋めた整地土である。したがって、奈良時代前半に開削され10世紀頃まで存続した溝とみて間違いない。なお、この溝は本調査区の北方、約50mの地点でおこなった昭和53年度調査では、後世の削平のため検出していない。

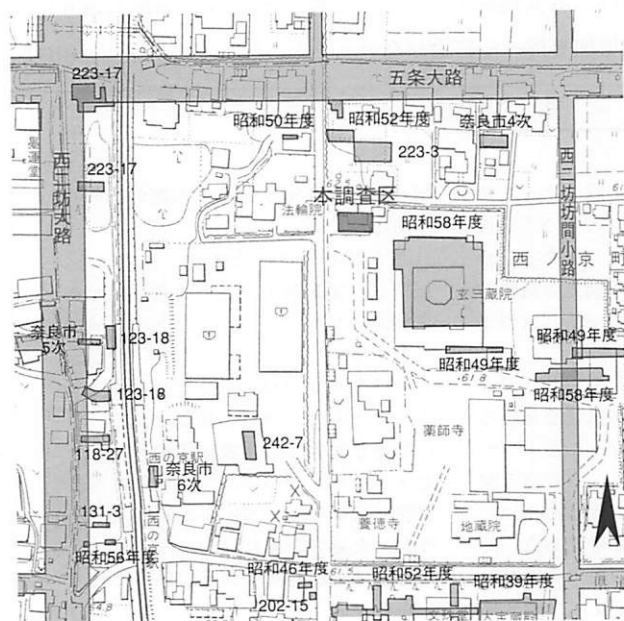


図70 発掘調査位置図 1:4000



図71 石組井戸SE2720

SB2711～2714・2716 いずれも調査区西半で検出した掘立柱建物。直径10～15cmの柱根を残す穴もある。このうちSB2716は柱穴が大きいわりに浅く、礎石建物の可能性がある。出土遺物からいずれも11世紀後半～12世紀中頃の遺構である。

SA2717 調査区西半で検出した掘立柱東西塀。

SE2715 調査区北壁にかかる井戸。井戸枠は抜き取られており、抜取穴から10世紀中頃～11世紀後半の土器・瓦が多量に出土した。木筒も一点出土している。

SE2720 調査区中央部で検出した石組井戸。最下部には幅約20cmの板材を敷き、大小の曲物を上下に重ねている。人頭大の玉石を曲物上端付近から約3段積むが、上部は削平されており、玉石の上端レベルはそろわない。埋土には奈良時代～11世紀代の瓦のほか、11世紀前半～12世紀前半の土器を多量に含む。

SD2721 調査区東半で検出した東西溝。底部は凹凸があり、深い部分で遺構検出面から約30cmをはかる。溝の西端をSE2720付近まで検出しており、出土遺物からもSE2720とほぼ同時期の遺構と考えてよい。

SK2722・2723 調査区南東で検出した大土坑。緑黄褐微砂の地山を掘り込み、ただちに埋めたような状況を呈する。調査区東半にある他の土坑（土取り穴）と違って円形をなすため、井戸かもしれないが水はまったく湧かない。SD2721やSE2715より古い。

SD2725 調査区中央を流れる南北溝。整地土（淡黄褐砂質土）の下層にあり調査区北部で平面を検出した。溝幅は約5m。堆積層は粗砂からなり有機物を多量に含むが、遺物を含まない。歴史時代以前の自然流路であろう。

SD2730 調査区南西にある斜行溝。南北溝SD2710を掘り下げた底で検出し、そのレベルでの溝幅は約2.5m。堆積土はSD2725と同様で、歴史時代以前の自然流路と考えてよい。調査区南端部でSD2725と合流する。なお、調査区西半は比較的均質な砂を地山とし、この付近は自然流路が交錯しているようだ。

調査区東半には、SK2724のほか多数の土坑がある。いずれも不整形で深さも一定せず、なかにはフラスコ状に掘られている穴もある。遺物もほとんど出土しないことから、土器製作の原料を得るための土取り穴とみられる。少量の遺物を見ると、これらの土坑の掘られた年代は11世紀から12世紀頃と考えられる。（箱崎和久）

### 3. 出土遺物

井戸枠曲物 SE2720の井戸枠に用いられた曲物は、上段が径48.1cm、高さ27.5cm。下段は径44.3cm、高さ32.3cm。いずれもヒノキ材。上段、下段ともに高さの等しい1組の曲物を、縦じ合わせが対向するように重ね合わせて二重にしている。打ち合わせは右前。側板の表面には、幅1～2cmの削り調整痕が観察される。

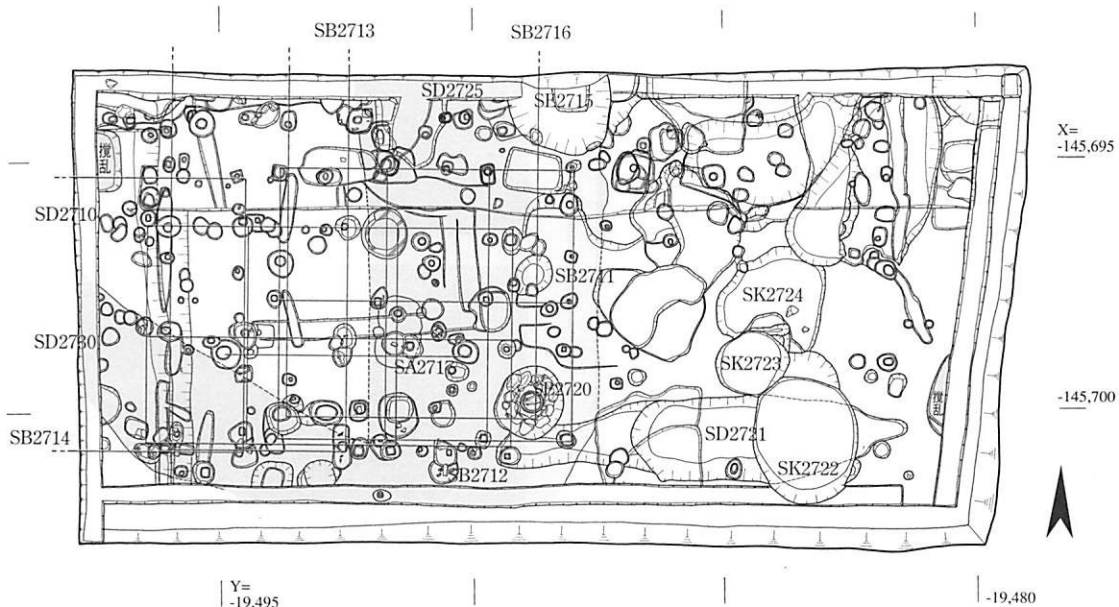


図72 第293-8次調査 遺構平面図 1:150

下段の曲物をみると、側板は上下2枚を継ぎ足しており、その合わせ目を挟んで上下1対の内外貫通する小孔が5ヶ所、口唇部に2ヶ所、底部に3ヶ所確認できる。遺存している例からみて、径2mmほどの木釘が打たれていたものであろう。これらは、内外2つの曲物を固定、補強するためのものと考えられる。

また、口縁部には、半円形の刳り込みが1ヶ所ある。こうした刳り込みは、麻を績んだ糸をためておく苧桶、あるいは漆桶などにみられ（岩井宏實『曲物』1994）、下段口縁であることから、転用であることを想定させる。なお、上段曲物の内面には漆の付着が認められた。

側板の下端より10cm上には、径8mmの円の中心に支点である小穴をもつ円弧文が3個、三角形に陰刻されている。この陰刻の類例は、岩手県平泉町柳之御所跡で、12世紀後半の井戸状遺構21SE1から出土した2点の曲物にみられ、それぞれ「大」と円弧文5個、円弧文4個を刻している（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『柳之御所跡』1995）。なお、本例については西村歩氏のご教示を得た。

（次山 淳）

**土器** 調査区全域から、多量の土器が出土した。ここでは遺構から出土した土器のうち、代表的なものを示す。

1～4はSD2710出土の土師器。1は坏Bで外面に磨きを施すが、内面の暗文は風化のために確認できない。2はb0手法で調整する坏Aで、底部外面に「大」の墨書がある。1・2ともに奈良時代前半のものであろう。3は皿、4は小皿で、9世紀後半のもの。

5～34はSD2721出土。5～23は土師器で、5～8は坏、9～18は小皿、19～21は台付皿、22・23は羽釜。小皿には口縁端部が外反するもの（9・10・14・15）、肥厚するもの（11～13）と「て」字状になるもの（16～18）がある。5・6・9・14・15・21は灯火器として使用する。24は白磁碗の底部。28～30は黒色土器碗。28は漆の容器として使用し、内面に黒漆が付着している。見込みの暗文は30が放射状で29がジグザグ文。25～27は瓦器小皿で、27は口縁内面の磨きを欠く。31～34は瓦器碗。31の高台内には円環状の突帯をもち、29の底部外面には針による刻書がある。見込みの暗文は31が格子目文、34が螺旋文で他はジグザグ文。これらの土器には11世紀前半～12世紀前半の年代が与えられる。

35～48はSE2715出土。35～42は土師器で、35～39が小皿、40が皿、41・42は杯。43～49は瓦器で、43～46が小皿、47・48が碗、49は小碗。45は口縁部内面に磨きを持



図73 石組井戸SE2720 井戸枠下段曲物

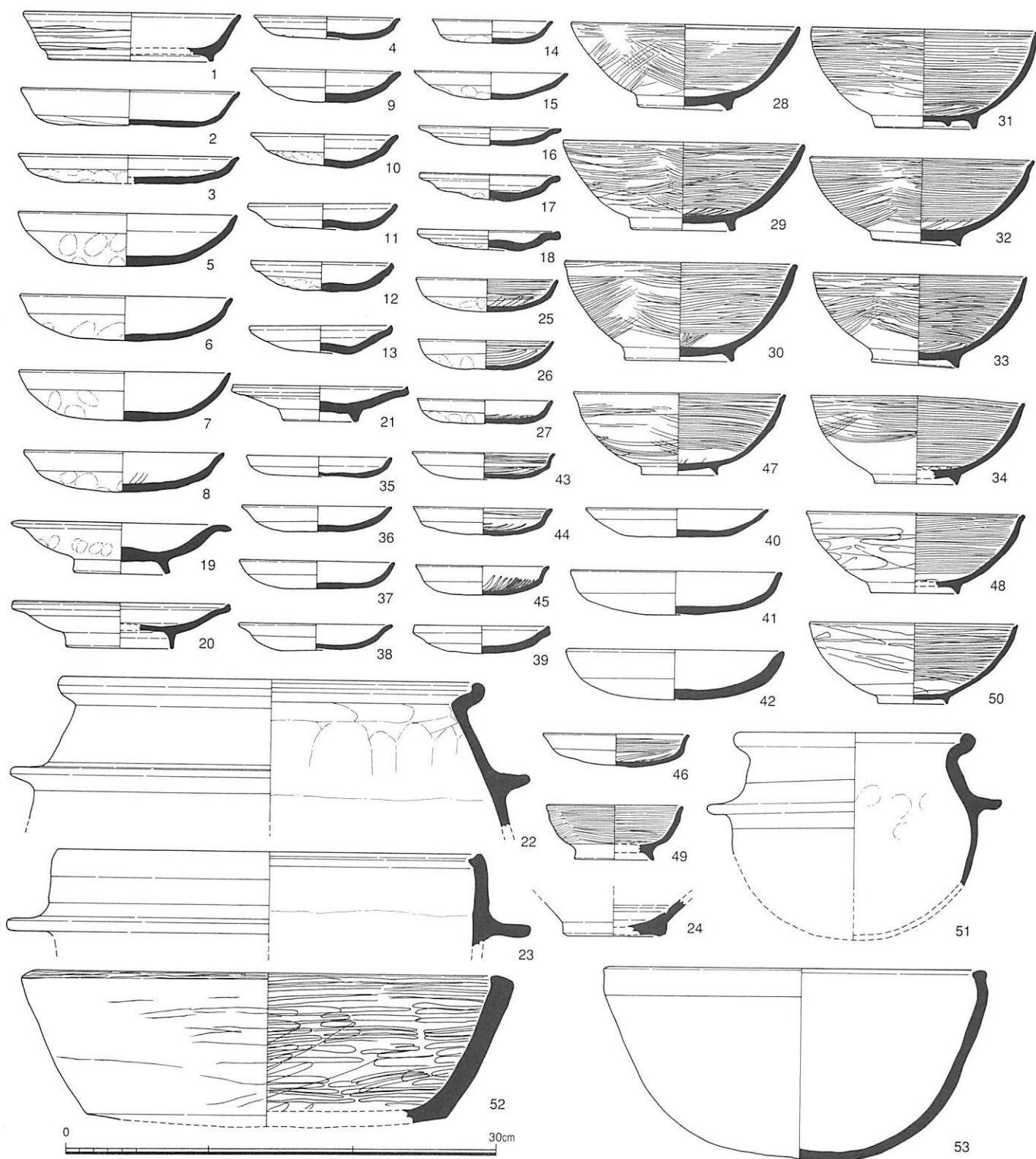


図74 第293-8次調査出土土器 1:4

たない。49は寺院特有の器形とも言うべき土器で、台付皿と組み合わせて仏具の六器として使用する。瓦器碗の外面の磨きがSD2721出土土器に比べて粗雑になり、高台も断面三角形で細くなる。11世紀後半のもの。50・51はSK2724出土。50は瓦器碗で、見込みの暗文は螺旋文。外面の磨きも粗雑になる。51は土師器羽釜で、小型である。ともに12世紀前半代。

52・53はSE2720出土。52は瓦質土器の盤で、外面の磨

減が著しいが、内面は丁寧に磨いている。53は土師器鉢。口縁部直下のみを幅狭くヨコナデする。煮炊器として使用し、外面には煤が付着する。他には11世紀後半～12世紀前半の土師器、瓦器が出土している。(玉田芳英)

瓦塼類 瓦塼類は暗灰褐砂質土層のほか、SD2710、SE2720、SD2721、調査区西半の小柱穴群などから出土した。薬師寺創建期の軒瓦から中世の巴瓦まで年代的にも幅広く出土しているが、3分の2は平安後半のもので

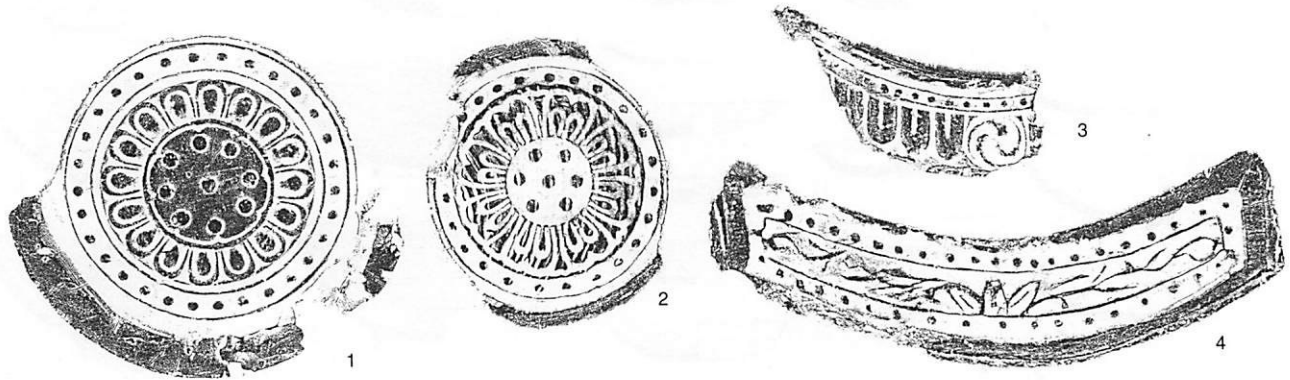


図75 第293-8次調査 出土軒瓦 1:4

表9 第293-8次調査 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6276	A	1	6641	G	2
6304	Eb	1	6641	H	2
薬師寺 38		1	6663	I	1
49		1	6763	B	1
50		1	薬師寺 236		1
52		1	255		1
56		1	263		1
82		1	267		1
86		1	277		4
87		1	285		1
89		1	344		1
94		2	平安		13
平安		3	中世		1
中世		1	型式不明		5
中世巴		3			
型式不明		3			
軒丸瓦計		23	軒平瓦計		35
	丸瓦		凝灰岩	道具瓦他	
重量	399.5kg	1,522.0kg	47.1kg	1.1kg	スタンプ 1
点数	1,897	9,202	61	3	

ある。そのなかでも、薬師寺初出の軒瓦がみられる点と、基壇の四半敷を示す三角形磚が比較的多数出土した点が注目できる。

なお、大部分の瓦は廃棄された状況で出土しており、検出した遺構の所用瓦とは認められない。

SD2710の底部からは718年～738年頃に比定される軒丸瓦6304Ebが出土した。薬師寺創建期の瓦葺建築が、SD2710の近くに共存していたことを示す注目すべき瓦といえる。東西溝SD2721からは、薬師寺創建期から中世にかけての瓦が出土するが、平安後半の軒平瓦（図75-3）は初出である。同様に井戸SE2720からも、薬師寺創建期から中世にかけての瓦が出土し、なかでも初出の鎌倉時代の軒瓦（図75-1、4）は目を引く。また、SB2713の柱穴抜取穴からは、初出の軒丸瓦（図75-2）のほか、薬師寺軒瓦型式49（平安中頃）や同277（平安後半）が出土している。（千田剛道）

#### 4. まとめ

本調査では、奈良時代の苑院跡を裏付ける遺構は検出しなかった。しかし、SD2710の性格については、今後おおいに検討すべき課題である。SD2710の溝幅は、検出遺構から推して4mにおよび、しかも奈良時代前半の開削とみられることから、薬師寺造営時に計画された溝としてよい。この位置に想定できるのは、薬師寺北門から中心伽藍に向かってのびる寺内南北道路（西二坊坊間西小路相当）の東側溝か、もしくは、平城京右京六条二坊九坪に相当する苑院推定区画の西側溝である。西二坊坊間西小路の推定中心線から、SD2710（調査区西端）までの距離は約42尺であり、前者とすれば、寺内道路は大路クラスの幅をもつことになる。一方、後者と考えると、小路クラスの寺内道路が築地等で厳格に区画されていた状況を想定できる。

ところで薬師寺寺域内の坪割に関しては、平城京右京六条二坊の七坪と十坪境にある西二坊坊間路東側溝（昭和49年度・58年度調査）のほか、十四坪と十五坪間にある六条条間路南側溝（昭和46年度調査）を検出しており、いずれも平城京の条坊側溝を寺内まで延長したものである。したがって現時点では、SD2710を苑院区画の西側溝とみる後者の方が蓋然性は高いといえるが、その正否については今後の発掘調査成果を待ちたい。

本調査区では近隣の発掘調査と同様、平安後半を中心とする多量の土器が出土し、このころに子院が築えていたことをうかがわせる。しかし、四半敷を示す三角形磚や中心伽藍ではみられない型式の軒瓦が出土することは、床を張らない瓦葺仏堂が中心伽藍とはまったく別に造営されていた可能性を示唆しており、子院内における仏堂とその造営体制について、興味深い事例を提供したといえるだろう。（箱崎）